文京学院大学人間学部研究紀要 Vol.9, No.1, pp.17 ～ 36, 2007.12

D. F. Krill による実存主義ソーシャルワークの批判的検討
ー援助枠組みの「限界」とその乗り越えの可能性ー

田　嶋　英　行*

Key Words: 世界内存在，対話，沈黙すること，良心の呼び声

はじめに

Donald F. Krill による実存主義ソーシャルワーク（existential social work）は，「疎外（alienation）」に悩むクライエントを援助するために展開された援助枠組みである．ここでいう「疎外」とは，自らが「存在する意味」を把握することができず，自己（self）が不安定な状態にあることを意味する．Krill はクライエントという存在者を，「世界内存在（In ‐ der ‐ Welt ‐ sein ；being ‐ in ‐ the ‐ world）として捉えた．彼が展開した実存主義ソーシャルワークにおいては，クライエントにおける「世界」観もしくは「世界」のあり方を「了解することが最も重要となる」（Krill[1996], p. 267）．ソーシャルワーカーは，クライエントと「対話」することによって，彼らの「世界」観，すなわち「世界」のあり方を了解し，それを肯定していく．その結果としてソーシャルワーカーは，彼らの「世界」観もしくは「世界」のあり方を了解していくことになるが，同時にクライエント自身もそれを「自ら」了解していくことになる．「世界内存在」としての彼らが，自らの「世界」観もしくは「世界」のあり方を「自ら」了解することができるようになったとき，その「存在する意味」を把握することになるのである．

しかしクライエントは，果たして本当に，ソーシャルワーカーとの「対話」を通じて，自らが「存在する意味」を把握することができるようになるのであろうか．Martin Heidegger は「世界内存在」という概念を，人間が固有の生の「世界」に生きている存在者であることを表現するために作り出したのであった．しかし彼自身は，その「世界内存在」としての人間が，日常的には「頽落（Verfallen）」した状態にある，すなわち「非本来的」な状態にあると考え

＊人間学部人間福祉学科

ていた．つまり，自らが「存在する意味」を把握し得ない状態にあると考えたのである．そして彼は，このような状態にある人間について，1）「空談（Gerede）」，2）「好奇心（Neugier）」，3）「曖昧性（Zweideutigkeit）」，という 3 つの指標を提示した．そうであるならば，果たして Krill が述べているように，互いに「頽落」した状態にある，すなわち「非本来的」な状態にあるクライエントとソーシャルワーカーが，ただ「対話」をおこなうだけで，クライエント自身が「本来的」な状態となる，すなわち自らが「存在する意味」を把握することができるようになるのであろうか．「対話」を通じて，自らの「世界」観もしくは「世界」のあり方を「自ら」了解することができるようになったとき，本当にその「存在する意味」を把握することができるようになるのであろうか．それはただそれら両者が「空談」を展開しただけに過ぎないのであり，実際ところクライエントは，「非本来的」な状態のまま置きざりにされることになりはしないであろうか．

本稿では，「世界内存在」という概念を作り出した Heidegger 自身による見解にまで遡ることによって，Krill による援助枠組みにおける「限界」を明らかにし，さらにその乗り越えの可能性について模索する．

なお Krill による実存主義ソーシャルワークの先行研究としては，西光によるもの（1982）[1] と信川によるもの（1998）[2] が挙げられるが，どちらもそれを「概観すること」のみを目的としたものであり，本稿のようにそれを批判的に検討したものではない．したがって直接的な意味で，本稿と同様の志向をもった先行研究はこれまで存在していない．

第 1 章　Krill による実存主義ソーシャルワークの援助枠組み

筆者は先に，Krill による実存主義ソーシャルワークの援助枠組みのあり方を明らかにしている [3]．ここでははじめに，それにおける見解をもとに，Krill による実存主義ソーシャルワークの援助枠組みの具体的展開のあり方について述べる．その後に，なぜクライエントが自らの「存在する意味」を把握することが可能になるのかについて論じる．

第 1 節　Krill による援助枠組みの具体的展開

Krill による実存主義ソーシャルワークは，「疎外」に悩むクライエントを援助するために展開された援助枠組みであるが，彼はクライエントが「自我に囚われた状態（entrapment of the ego）」にあると考えた．彼らは，他者とのつながりを喪失しているのである．なおここでいう自我とは「意識するわたくし」，すなわち主体（subject）としてのわたくしのことである．そして彼らが「順応すること（conformity）」，「情熱的になること（passion）」，「理性的であることを絶対視すること（rationalism）」，以上 3 つの手段を用いることによって，自らの自己を安定させようとすると考えたのであった．なおここでいう自己とは「意識されるわたくし」，すなわち客体（object）としてのわたくしのことである．

まず「順応すること」とは，「自我に囚われた状態」にあるクライエントが「他者によって決められた生き方に同調し，かつそれにしたがって生きていこうとすること」（Krill［1978］，p. 45）である．この手段を用いるクライエントは，自己を安定させるため，他者によって決められた生き方，すなわち他者によって決められた自己を生きようとする．次に「情熱的になること」であるが，これはクライエントが自己を安定させるため，何らかのものごとに情熱的に取り組んでいくことを述べたものである．Krill によるとそれは，「最も活力に満ちた努力」（ibid）であるという．さらに「理性的であることを絶対視すること」とは，クライエントが理性的に自己のあり方を決め，それにしたがうことによって自己を安定させようとすることである．Krill は彼らがこの手段を用いると，「理性的であることそのものを高く位置づけ，かつそれを偶像化する」（ibid）ようになるという．しかし実際のところ，彼らはこれらの手段を用いて自己を安定させることはできない．これらを用いるクライエントは，他者によって決められた自己を生きていくならば，それを安定させることができるという錯覚（illusion）を抱いていると考えられるのである．

Krill による実存主義ソーシャルワークにおいては，実存主義（existentialism）から導き出された次の治療概念（therapeutic concepts）をもとに，クライエントを「疎外」に悩むことから解放しようとする（Krill［1996］, pp. 256-259）．ここでいう治療概念とは，援助の方向性を示すものである．それらはすなわち，「対話の必要性（necessity of dialogue）」，「選択の自由（freedom of choice）」，「傾注（commitment）」，「苦悩における意味（meaning in suffering）」，「幻滅（disillusionment）」の 5 つである．

まずソーシャルワーカーは，これらの治療概念のなかの「対話の必要性」にもとづいた援助を展開していく．クライエントは「自我に囚われた状態」にあり，自己にのみ関心を向けている．そこでソーシャルワーカーは，まず彼自身がクライエントと「対話」することによって，彼らが自己以外の他者（すなわち，ソーシャルワーカー）にそれを向けていくことを促していく．その際には，「選択の自由」，「傾注」，「苦悩における意味」の 3 つを重視していくことになる．

「選択の自由」とは，クライエント自身が自らの生き方を「自由」に選択していく力があることを強調する概念である．次に「傾注」とは，ソーシャルワーカーが彼らの「世界」観（worldview）を肯定していくことの重要性を表した概念である．さらに「苦悩における意味」とは，彼らが自らの生き方を変えていく際の苦悩を，ソーシャルワーカーが積極的に肯定していくことの重要性を表した概念である．

クライエントはソーシャルワーカーとの「対話」を通じて，他者に関心を向けていく端緒をつかんでいくようになる．ソーシャルワーカーは，彼らとの「対話」をさらに進めていくことにより，先に挙げた 3 つの手段を用いることによって自己を安定させることができるという錯覚を，彼ら自身が放棄するよう促していく．このことを端的に表現した概念こそが，すなわち「幻滅（disillusionment）」である．クライエントはソーシャルワーカーとの「対話」を通じて，

それまで抱いてきた錯覚（illusion）を手放していくことになり，それによって「自我に囚われた状態」を抜け出していく．そうすることにより彼らは，ソーシャルワーカーという他者や，彼らの家族や親戚，友人といった重要な他者（significant others）との間に緊密なつながりを形成していくことができるようになるのである．

Krill によるとクライエントは，他者との間に緊密なつながりを形成することによって，両者の間に互いの「存在する意味」を顕現させる働きであるところの「存在活動（Being activity）」を生み出していくことになり，それによって両者はともにその「存在する意味」を把握することになるという．「存在活動の全過程と同一化する体験をした瞬間に，『疎外』に悩むことから解放される」（Krill［1978］, p. 36）のである．

第 2 節　「存在活動」と「ことば」

クライエントは，ソーシャルワーカーや重要な他者といった人びととの間で「存在活動」を生み出していくことによって，自らが「存在する意味」を把握していくことになる．そのためにソーシャルワーカーは，まず彼らとの間で「対話」をおこなっていくのであった．「対話」とは，すなわち互いに話すことであり，「ことば」の交流をおこなうことを意味する．したがって「存在活動」とは，すなわち「ことば」の交流をおこなうことを意味していると考えられるのである．そしてこの「ことば」こそが，その意味を顕現させるのである．それではなぜそれが，自らが「存在する意味」を顕現させることになるのであろうか．

前述したように Krill による援助枠組みにおいては，まずソーシャルワーカーがクライエントと「対話」（すなわち，「ことば」の交流）をおこなっていくことになる．その際には，「選択の自由」，「傾注」，「苦悩における意味」という 3 つの治療概念を重視していくのであった．「ことば」の交流がクライエントの「存在する意味」を顕現させることのできる理由は，これら 3 つの治療概念のうちの「傾注」という概念にあると考えられる．

この「傾注」という概念は，前述の通り，ソーシャルワーカーがクライエントの「世界」観を肯定していくことの重要性について述べたものである．ソーシャルワーカーはクライエントとの「対話」のなかで，彼らが話す「ことば」にじっくり耳を傾け，彼らの「世界」のあり方を了解しそれを肯定していく．それによって彼らは，自らの「世界」観に関心を向ける他者がいることを知ることになり，他者に関心を向けていくようになるのである．

ソーシャルワーカーはクライエントと「対話」することによって，彼らの「世界」観，すなわち「世界」のあり方を了解し，それを肯定していくことになる．それでは，「世界」観もしくは「世界」のあり方における「世界」とは，一体何を意味しているのであろうか．

Krill による実存主義ソーシャルワークは，実存主義による影響を受けることによって構築された援助枠組みである．Krill はそれから，人間という存在者を「世界内存在」として捉えていく方法を積極的に摂取していった[4]．そしてその概念を，自らが展開した援助枠組みの基盤に据えていったのであった．それにおける「世界」とは，すなわち「自己自身とのかかわり，

他者とのかかわり，それを通じての超越者とのかかわりをふくむもの」（飯島[1965], p. 391）である．Krill はこの「世界内存在」という概念をもとに，クライエントという存在者が重要な他者との関わりなしには成立しないと考え，彼らがそれらの人びとと緊密なつながりを形成する援助枠組みを展開したのである．したがって「世界」観もしくは「世界」のあり方における「世界」とは，「世界内存在」という概念におけるそれのことを指し示していると考えられるのである．

Krill による援助枠組みにおいては，クライエントにおける「世界」観もしくは「世界」のあり方を「了解する（understand）ことが最も重要となる」（Krill[1996], p. 267）．Krill によるとこのクライエントにおけるそのあり方というものが，おもに「彼らにとって意味のある他者とそれらの人びとの彼らに対する期待についてのパターン」（ibid），また「自己自身についての信念や，肯定的および否定的判断，そして自己自身についての仮定（assumption）」（ibid）によって成り立っているという．そして，このクライエントにおけるそのあり方を了解できれば，彼らが抱えている問題を「完全に理解できる」（ibid, p. 268）という．

前述した通りソーシャルワーカーは，クライエントと「対話」することによって彼らの「世界」観，すなわち「世界」のあり方を了解し，それを肯定していくことになる．「対話」とは，「ことば」の交流のことであった．したがって「ことば」とは，クライエントにおけるそのあり方について，彼ら自身が語ったもののことであると考えられるのである．ソーシャルワーカーはクライエントとの「対話」，すなわち「ことば」の交流を通して彼らの「世界」観もしくは「世界」のあり方を了解していくことになるが，同時にクライエント自身もそれを「自ら」了解していく．彼らは，ソーシャルワーカーに対してそのあり方を「語る」ことによって，すなわち「ことば」にすることによって，「自ら」それを了解していくのである．このとき彼らは，自らが「存在する意味」を把握することになる．「世界内存在」としての彼らが，自らの「世界」観もしくは「世界」のあり方について「自ら」了解することができるようになったとき，その意味を把握するのである．

第２章　「世界内存在」

ここでは，Heidegger 自身における「世界内存在」についての見解を整理する．はじめに，それにおける「世界」という概念についての整理をおこない，そのうえで人間，すなわち現存在（Dasein）の日常的な存在のあり方としての「世人（Das Man）」という概念について述べる．さらに，それにおける「内存在」という概念についての整理をおこなう．そして，現存在の「非本来的」なあり方である「頽落」という状態について述べる．

第１節　「世界」および「世人」について

現存在は，「世界内存在」として存在する．そしてそれは，自分自身のあり方に対して，気

遣う（関心を向ける）存在者[5]である．かつそのようなものとして，自分自身を了解している存在者である．現存在は，つねに自分自身のあり方を問うという仕方で存在する「現実存在＝実存（Existenz）」なのである．

「実存」する現存在からすれば，「世界」は決して客観的に存在しているわけではなく，むしろそれが気遣うことによって（関心を向けることによって）形成されるものである．そして現存在は，それ自体で自立している（あるいは孤立している）存在者ではなく「共現存在」，すなわち他者とともに互いに存在を規定し合いながら存在している．「世界」は，「そのつどすでにつねに，私と他者たちと共に分かち合っている」（ハイデガー[2003a], p. 307）のである．Krill による援助枠組みにおいてソーシャルワーカーは，「対話」を通じてクライエントの「世界」を了解していくが，それが可能なのは，ソーシャルワーカー自身が彼らのそれをともに分かち合っているからである．

Heidegger によると現存在は，日常的に平均的な存在了解（自分自身についての了解）をもつが，彼はこのような存在のあり方を「世人」と呼ぶ．そして「世人」として現存在は，懸隔性（Abständigkeit），平均性（Durchschnittlichkeit），均等化（Einebnung）という，3 つの存在のあり方をとっているという．懸隔性とは現存在が，他者に比べて立ちおくれているため，「他者たちへと態度をとる関係のうちでその遅れを取りもどそうとすること」（前掲, p. 326）や「他者たちに対して優位を保ちながら，他者たちを押えつけることをねらうこと」（同前）を意味する．平均性とは現存在が，「当然とされているもの，ひとが通用させたりさせなかったりするもの，ひとが成果を是認したり否認したりするもの，そうしたものの平均性のうちにおのれを保持している」（前掲, pp. 328-329）ことを意味する．均等化とは現存在が，先に挙げた平均性をもとに，「でしゃばってくるあらゆる例外を監視する」（前掲, p. 329）ことを意味する．Heidegger は，「世人」としての現存在におけるこれら 3 つの存在のあり方を，「公共性（Öffentlichkeit）」と呼んでいる．「世人」は，この「公共性」という存在のあり方をとりつつ，「その日常性におけるそのときどきの現存在の責任を免除する」（前掲, p. 330）．つまり，自分自身の本来的な存在のあり方から逃避することによって，「誰でもない者」（前掲, p. 331）に成り下がってしまっているのである．

第２節　「内存在」について

先にも述べたように「実存」する現存在からすれば，「世界」は決して客観的に存在しているわけではなく，むしろそれが気遣うことによって（関心を向けることによって）形成されるのであった．したがって「世界内存在」における「内存在」とは，すなわち，現存在が「世界」のうちを生きるという存在のあり方を言い表していることになる．

「世界」は，現存在としての人間が，「いま－ここ」に存在するからこそ開示されるものである．現存在における「現（Da）」とは，すなわち，「世界」が開示される起点である．このように「世界」は「現」によって開示されるのであるが，同時にそのうちに生きる「内存在」

のあり方をも開示する．つまり「現」という表現には，「おのれ自身が明るみである」（ハイデガー[2003b], p. 8）ことが言い表されているのであり，それこそが「世界」と「内存在」が存在することを可能にするのである．

「内存在」の分析は，現存在における「現」の本質を取り出すことによって可能となる．実際のところそれからは，「情状性（Befindlichkeit）」，「了解（Verstehen）」，そして「語り（Rede）」という 3 つの本質を取り出すことができる．つまりそれは，これら 3 つの本質によって成り立っていると考えられるのである．

Heidegger によれば一つめの「情状性」が，「現」の本質を最も端的に表しているという．つまりそれは，存在的（ontisch）[6] には「最も熟知で最も日常的なもの，つまり，気分とか，気分的に規定されていること」（前掲, p. 12）と言い表すことができるものであり，それを存在論的（ontologisch）[7] に表現するならばこのように（「情状性」と）表されることになる．現存在という性格をもった存在者（すなわち人間）は，この「情状性」において，つねに自分自身に当面している．つまり，気分的に規定された情状のうちにあるものとして，自分自身を見出してしまっているのである．このことは現存在が，「被投性という情状のうちにあるという在り方」（前掲, p. 15）にあることを意味する．

現存在は自分自身を，すでに気分的に規定された情状のうちにあるものとして見出していた．つまり現存在は，それにおいてすでに「了解」が生じているのであり，したがって「情状性」と「了解」の両者は，「等根源的」（前掲, p. 32）といえるのである．また「了解」は，現存在が自らの存在を，諸可能性をめがけて企投するモメント（契機）となるものである．「諸可能性へとかかわるこうした了解しつつある存在は，それらの諸可能性が開示されたものとして現存在のうちへと反転することによって，それ自身一つの存在しうることになる」（前掲, p. 47）のであり，「了解の企投するはたらきは，おのれを完成するという固有の可能性をもっている」（同前）のである．Heidegger は，この「了解の完成」を「解釈」と名づけている．またこの「解釈」の派生的様態として，「陳述」を挙げることができる．「陳述」とは，すなわち「腹蔵なく言うことを意味する」（前掲, p. 63）．それは，「解釈」されたことを他者に提示し伝達することによって，「共に見えるようにさせる」（前掲, p. 64）ことである．

最後に「語り」であるが，これは現存在における「現」の本質として，「情状性」，「了解」とともに「等根源的」（前掲, p. 78）である．現存在は，自分自身をすでに気分的に規定された情状のうちにあるもの（「情状性」）として見出している，すなわち「了解」しているのであった．「了解」は，現存在が自ら語ることを通しておこなわれることになる．したがって「語り」は，「情状性」や「了解」とともに「等根源的」なのである．

Heidegger によると「語り」には，「聞くこと（hören）と沈黙すること（Schweigen）が可能性として属している」（前掲, p. 79）．「語り」は，それそのものだけで成立するものではない．それに応じた働き，すなわち「聞くこと」が属していなければならないのである．つまり「語りに応じた了解する働き，いわば語りの自己了解としての聞く作用があって初めて，語りは十

全なものとなる」（寺邑[1980], p. 125）のである．さらにそれには，「沈黙すること」が可能性として属している．それは，決して何も言うことをもたないのではなく，「言うべき何事かを持っているから可能なのである」（同前）．Heidegger によれば，「たがいに共に語りあっているとき沈黙している人は，言葉のつきない人よりもいっそう本来的に，『了解させるように暗示する』ことができる，言いかえれば，了解内容を完成させることができる」（ハイデガー[2003b], p. 85）という．

「語り」には，「聞くこと」と「沈黙すること」が属しているのであり，とりわけ後者においては，語っている当人に対してその了解内容を完成させることを可能にするのである．

第３節　「頽落」とは何か

冒頭でも述べたが，Heidegger は，その「世界内存在」としての現存在が，日常的には「頽落」した状態にある，すなわち「非本来的」な状態にあると考えていた．つまり，自らが「存在する意味」を把握し得ない状態にあると考えたのである．そして彼は，このような状態にある現存在について，1)「空談」，2)「好奇心」，3)「曖昧性」，という 3 つの指標を提示したのであった．

まず「空談」とはすなわち，「語り」の「非本来的」なあり方のことであり，日常的にわれわれが話しているもののことを指している．われわれはたいていの場合，使用している言語を「世間に流通している既成の解釈のパターン，被解釈性に依拠」（寺邑[1980], p. 127）しながら用いている．日常的な現存在は，「大抵そうした平均的な了解の型へと委ねられている」（同前）のである．

「語り」は，「情状性」や「了解」とともに「等根源的」であった．つまりそれは，自らのあり方（「情状性」）を「了解」および「解釈」し，さらにそのうえで「陳述」するものなのであり，本来的に，自らを他者に「開放」するものと考えられるのである．

しかし日常的に「頽落」した状態にある現存在は，そのような，自らを他者に「開放」するものとしての「語り」を持たない．彼らは，他の人びとが話している内容を「語り広め，語りまねる」（ハイデガー［2003b], p. 96］）だけである．彼らが話している内容は，決して，彼ら自身のなかから自ら紡ぎ出しているわけではない．それは「すでに最初から地盤のうえに生えぬいていなかった」（同前）だけでなく，そのような「語り広め，語りまね」によって「完全に地盤を失うまでにいたる」（前掲, pp. 96-97）．ここに，「空談が成立する」（前掲, p. 97）のである．このように「空談」とはすなわち，先にも述べたように，「語り」の「非本来的」なあり方のことなのである．

つぎに「好奇心」であるが，これは「了解」の「非本来的」なあり方のことである．そもそも「了解」とは現存在が，自らの存在を，諸可能性をめがけて企投するモメントとなるものであった．そのはたらきは，「おのれを完成するという固有の可能性をもっている」．この「了解」における企投という性格は，「視（Sicht)」によって構成される．これは「存在者へと近

づくあらゆる通路と，存在へと近づくあらゆる通路とを通路一般として性格づける」（前掲, p. 42）ものであり，「存在と存在者を露わにする」（寺邑[1980], p. 114）．しかし，日常的に「頽落」した状態にある現存在においてこの「視」は，「存在と存在者を露わにする」ためにではなく，ただ「見るだけのため」（ハイデガー[2003b], p. 105）にある．つまりそれは，「新しいものからあらためて新しいものへと飛び離れるだけのため」（同前）にあるのであり，そしてそれは「好奇心」と言い表されるものとなる．

最後に「曖昧性」についてであるが，これは「了解」そのものの「非本来的」なあり方として捉えられるものである．先にも述べたように「了解」とは現存在が，自らの存在を，諸可能性をめがけて企投するモメントとなるものであり，かつその企投するはたらきは，「おのれを完成するという固有の可能性をもっている」のであった．しかし日常的に「頽落」した状態にある現存在においては，すでにそのはらたきは封じられており，彼らはただ，一般に流布している見解や意見に同調するに過ぎない．

このように Heidegger は，現存在が日常的には「頽落」した状態にある，すなわち「非本来的」な状態にあると考え，そしてそれについて 1)「空談」，2)「好奇心」，3)「曖昧性」，という 3 つの指標を提示したが，それらの内容についてはこれまで述べた通りである．

第 3 章　Krill による援助枠組みの検討

Krill による実存主義ソーシャルワークの援助枠組みは，おもに「対話の必要性」，「選択の自由」，「傾注」，「苦悩における意味」，「幻滅」という 5 つの治療概念から構成されるのであった．そのなかでも，「対話の必要性」が最も重要である．なぜならこの援助枠組みが，そもそも「疎外」の問題，すなわち自らが「存在する意味」を把握することができず，自己が不安定な状態にあるクライエントを援助するために展開されたものであり，彼らを援助するためには「対話」，すなわち「ことば」の交流が必要不可欠となってくるからである．しかしこれまで見てきたように，Heidegger は「世界内存在」として存在する現存在が，日常的には「頽落」した状態にあると考えていた．そのような状態にあっては「対話」，すなわち互いに「語り」合うことも，ただの「空談」に終わってしまいかねない．

ここでは，これまで見てきた Heidegger 自身による見解を踏まえ，Krill による援助枠組みの検討をおこなう．

第 1 節　Krill における「世界内存在」の捉え方

先に述べたように Krill は，クライエントが「世界内存在」として存在していると考えていた．しかし，そもそも彼自身によるその概念の捉え方は，Heidegger 自身によるものに依拠しているのであろうか．それについて，彼なりに独自の解釈をおこなってしまってはいないだろうか．

Krill による実存主義ソーシャルワークは，実存主義による影響を受けることによって構築された援助枠組みである．彼自身はその思想から，人間という存在者を「世界内存在」として捉えていく方法を積極的に摂取していったのであった．そしてこの概念を，自らが展開した援助枠組みの基盤に据えていったのである．

Krill による実存主義ソーシャルワークは，「疎外」の問題，すなわち自らが「存在する意味」を把握することができず，自己が不安定な状態にあるクライエントを援助するために展開された援助枠組みである．それに悩むクライエントは，「自我に囚われた状態」にあると考えられるのであった．彼らは「順応すること」，「情熱的になること」，「理性的であることを絶対視すること」，以上 3 つの手段を用いることによって，自らの自己を安定させようとする．本来ならば，彼らはその「存在する意味」の把握というものを，他者との「対話」を通じておこなっていかなければならない．他者との間で「ことば」の交流をおこなっていくことにより，自らの「世界」観もしくは「世界」のあり方を「自ら」了解していかなければならないのである．しかし「疎外」に悩む，すなわち「自我に囚われた状態」にあるクライエントは，それを自らのなかでのみおこなっていくことになる．ただしそれは「対話」ではなく，ただ「独語」をおこなっているに過ぎない．自分自身のあり方をめぐって，「わたくし」が「わたくし」に語りかけるようになるのであり，前者の「わたくし」が自我（主体）と化し，その一方で後者の「わたくし」が自己（客体）と化していく．彼らの「ことば」は，決して他者に語られることなく，自分自身のなかで完結してしまうことになる．そしてそれが，自我と自己の分裂という事態をつくり出していくのであり，さらにはそれが「自我に囚われた状態」を生み出していくことになるのである．

Krill による援助枠組みにおいてソーシャルワーカーは，クライエントと「対話」することによって，彼らの「世界」観，すなわち「世界」のあり方を了解し，それを肯定していく．ソーシャルワーカーは，「ことば」の交流を通して彼らの「世界」観もしくは「世界」のあり方を了解していくことになるが，同時にクライエント自身も，それを「自ら」了解していくのである．

Krill は，自らが展開した援助枠組みの基盤に「世界内存在」という概念を据えたのであるが，これは彼が援助をしていたクライエントに自我（主体）と自己（客体）の分裂という状態が見られ，それを克服するためにこの概念を導入する必要があったのである．この概念は「孤立した人間が，それ自体完結した外的世界に対して認識主体として立ち向かい，接近してゆくという近代哲学の基本的な構図を排し，自分がつねにすでに一定の世界の内にいることを既成事実として見いだすほかない人間の在りようを強調するもの」（高田[1994], p. 279）であり，彼はクライエントにおける自我と自己の分裂（主体と客体の分裂）という状態に「近代哲学の基本的な構図」を見出し，したがってその克服は必然的に，この概念をもっておこなわなければならないと考えたのである．

しかし筆者が見たところ，Krill はこの「世界内存在」という概念を，その考案者である

Heidegger 自身から直接的に摂取してはいない．むしろ心理学者，Rollo May から摂取していったと考えられるのである．May によって刊行された実存心理学（existential psychology）についての編著書（1958）[8] は，Krill に大きな影響を与えている．それは彼自身がこの文献のことを，「記念碑的な作品（monumental work）」（Krill[1996], p. 255）と評していることからも明らかである．

May はこの文献のなかで，実存主義の「思想」を積極的に心理療法（psychotherapy）に組み込んでいる．そして，それにおける実存的アプローチというものがどのようなものであるのかについて，考察をおこなっている．同様にソーシャルワーク実践のなかにその「思想」を組み込んでいこうとしていた Krill にとって，この文献は大いに参考になるものであった．May はこのなかで，「『世界内存在』としての人間のあり方」についての分析を詳細におこなっている（May[1958], pp. 55-61）．彼によると現代に生きる人びとは，過去 400 年間に「客体的世界からの主体としての人間の分離」を進めてきたことによって「認識論的孤独（epistemological loneliness）」という特異な孤立状態に陥っており，その結果として「疎外（alienation）」に悩むようになっているという（ibid, p. 57）．そして「世界内存在」という概念は，この状況を打開するために作り出されたものであり，「人間を世界と相互に関連する存在として再発見しようとし，かつ世界を人間にとって意味あるものとして再発見しよう」（ibid, p. 59）とする意図を持ったものであるという．「疎外」に悩むクライエントを援助するために，新たな援助枠組みのあり方を模索していた Krill にとって，この May による見解は大きな「意味」を持つものであった．Krill による援助枠組みにおいては，クライエント自身の「世界の設計（world design）を了解することが最も重要となる」（Krill[1996], p. 267）．彼によるこの見解の前提には，May による「世界」の定義，すなわち「世界（world）とは，個人がそのなかに存在し，かつその設計（design）に彼自身が参加している意味のある諸々の関係の構造である」（May[1958], p. 59）という定義がある．Krill はこれをもとに，クライエントが自らの「世界」観もしくは「世界」のあり方を了解することができたとき，自らが「存在する意味」を把握することが可能になると考えるようになっていったのである．しかし果たして，Krill が考えたように「疎外」に悩む，すなわちその「存在する意味」を把握することができずに自己が不安定な状態にあるクライエントは，ソーシャルワーカーという他者との「対話」を通じて，それを把握することができるようになるのであろうか．

確かに Heidegger は，「世界内存在」における「世界」という概念を，現存在にとって客観的に存在するものと捉えてはいない．May やさらには Krill が考えるように「世界内存在」という概念が，「人間を世界と相互に関連する存在として再発見しようとし，かつ世界を人間にとって意味あるものとして再発見しよう」とする意図をもっていることは事実である．「世界」は，「決して客観的に存在しているわけではなく，むしろそれが気遣うことによって（関心を向けることによって）形成される」のである．さらにそれは「そのつどすでにつねに，私と他者たちと共に分かち合っている」のであり，したがって他者としてのソーシャルワーカーも，

クライエントの「世界」を了解していくことが可能となるのである．しかし現存在は，日常的には「世人」として存在していた．この「世人」としての現存在は，懸隔性，平均性，均等化という 3 つの存在のあり方をとっていた．Heidegger は，このあり方を「公共性」と呼んでいた．「世人」は，この「公共性」という存在のあり方をとりつつ，「その日常性におけるそのときどきの現存在の責任を免除する」ことになる．それによって，「誰でもない者」に成り下がってしまっているのである．

先にも述べたように Krill は，「疎外」に悩むクライエントが「自我に囚われた状態」にあると考えた．その状態にあるクライエントは，「順応すること」，「情熱的になること」，「理性的であることを絶対視すること」，以上 3 つの手段を用いることによって，自己を安定させようとする．それは，クライエントが自分自身の客体（すなわち自己）の「あり方」を統制（コントロール）しようとしていることを表しているのであり，現存在としてのクライエントが「つねに自分自身のあり方を問うという仕方で存在」していることを表している．つまり，彼らが「実存」として存在していることを端的に表現していると考えられるのである．しかし，クライエントにおけるこれらのあり方というものは，自分自身の本来的な存在のあり方から逃避している．「順応すること」においては，「他者によって決められた生き方に同調し，かつそれにしたがって生きていこう」としており，「他者によって決められた生き方」に囚われている状態にある．また「情熱的になること」においても，「何からのものごと」に囚われている状態にある．さらに「理性的であることを絶対視すること」においても，「理性的であることそのものを高く位置づけ，かつそれを偶像化する」ことになり，やはり「理性的であること」に囚われている状態にある．このように「自我に囚われた状態」にあるクライエントは，「他者によって決められた生き方」や「何らかのものごと」，もしくは「理性的であること」といった事柄に囚われた状態にあり，自分自身の本来的な存在のあり方から逃避している．まさに「誰でもない者」に成り下がってしまっているのであり，彼らはまさに Heidegger のいう「世人」として存在していると考えられるのである．

ソーシャルワーカーもクライエントと同様に，日常的には「世人」として存在している．そのソーシャルワーカーが，やはり同様に「世人」として存在するクライエントと「対話」をおこなったところで，両者間で展開される「対話」はただの「空談」と化していく危険性が高いのであり，したがって彼らがその「存在する意味」を把握することができるようになるという保証は何もないのである．このように Krill は，May による「世界内存在」および「世界」についての解釈をもとに自らの援助枠組みを展開していったのであるが，却ってそれによって，これらの概念が本来持っている重要な点を見逃してしまっているのである．

第 2 節　「対話」と「沈黙すること」

Krill は，クライエントが「自我に囚われた状態」に陥ってしまう原因を，もともと彼らが「対話」をおこなうべき他者，すなわち重要な他者とのつながりを喪失しているところに求め

ていた．そのつながりを喪失したクライエントは，「ことば」の交流を自分のなかでのみおこなうようになっていく．しかし「ことば」は，そもそも他者との交流のなかにおいてのみ「存在する意味」を顕現させ得るのであり，したがって Krill による援助枠組みにおいては，クライエントがまずソーシャルワーカーという「他者」との間で交流をおこない，最終的に重要な他者との間で緊密なつながりが形成されるよう援助を展開していくことになるのである．

ただし先にも述べたように，クライエントがソーシャルワーカーや重要な他者といった「他者」との間で「ことば」の交流，すなわち「対話」をおこなっても，彼らが必ずしもその「存在する意味」を把握することができるようになるとは限らない．なぜなら彼らはともに，重要な他者も含め，日常的に「世人」として存在しているのであり，その間で展開される「対話」は，ただの「空談」と化していく危険性が高いからである．

クライエントが自らの「存在する意味」を把握するために必要なのは，ソーシャルワーカーや重要な他者といった「他者」との間で，ただ単に「ことば」の交流をおこなっていくことではない．彼らにとって本当に必要なのは，日常的に「世人」として存在している事態から離脱することを可能にするモメントである．

Krill は，クライエントとソーシャルワーカー，もしくは彼らと重要な他者との間で交わされる「対話」を「ことばの交流」として捉えていた．これこそが「存在する意味」を顕現させる働きであると考えられるのであり，彼自身はこれを「存在活動」と表現していた．そしてここにおける「ことば」とは，すなわち，クライエントが自らの「世界」観もしくは「世界」のあり方について「彼ら自身が語ったもの」のことであると考えられるのであった．ソーシャルワーカーは彼らと「対話」することによって，すなわち「ことばの交流」をおこなうことによって，彼らの「世界」観もしくは「世界」のあり方を了解し，それを肯定していく．その結果としてソーシャルワーカーは，彼らの「世界観」もしくは「世界」のあり方を了解していくことになるが，同時に彼ら自身もそれについて「自ら」了解していくのである．

このようにクライエントは，ソーシャルワーカーと「対話」することによって自らの「世界」観もしくは「世界」のあり方を了解していくのであるが，そのためにはソーシャルワーカーが，彼らの「ことば」にじっくりと耳を傾けていく必要がある．ソーシャルワーカーは，彼らが話す「ことば」，すなわち「彼ら自身が語ったもの」にじっくり耳を傾けていくのである．このことは，Krill が提示した 5 つの治療概念のうち，「傾注」という概念に最も端的に表されている．Heidegger のいうように，「語り」はそれそのものだけで成立しないのであり，それに応じた働き，すなわち「聞くこと」が属していなければならない．「語りに応じた了解する働き，いわば語りの自己了解としての聞く作用があって初めて，語りは十全なものとなる」のである．

ところで Heidegger は，「語り」には「聞くことと沈黙することが可能性として属している」と述べていた．そしてそれは，決して何も言うことをもたないのではなく，「言うべき何事かを持っているから可能」なのであり，さらに「たがいに共に語りあっているとき沈黙している人は，言葉のつきない人よりもいっそう本来的に，『了解させるように暗示する』ことができ

る，言いかえれば，了解内容を完成させることができる」のである．

われわれが他者との間で「対話」をおこなっているとき，それら両者の間で具体的におこなわれるのは，すなわち「語ること」,「聞くこと」そして「沈黙すること」の 3 つである[9]．一方が語っているとき他方は必ず聞いているのであり，両者がともに語りも聞きもしなくなった場合，沈黙が生じることになる．聞いている者は，他方が語っている内容を「黙って聞いている」のであり,「聞くこと」のなかには「本質的な契機として，相手に発言の機会を譲るという意味での『沈黙』が含まれている」（古荘[2002], pp. 184-185）のである．一方が語り始めると，他方は語るのを止め，聞くことに集中する．そして他方が語り始めると，一方が語ることを止め，聞くことに徹する．つまり「対話」においては，互いに沈黙し合うことによって，互いが語る機会を譲り合っていると考えられるのである．しかし一方が語るのを止め，他方にその機会を譲った場合，仮に譲られたほうが何も語らないとすれば，そのとき沈黙が生じることになる．

われわれは「対話」という状況において，他者に無理に発言させるわけにはいかない．「聞く」ことができるようになるためには，他者が何かを語り出すことを待たなければならないのである．それはあくまで他者の「自由」であり，われわれは「ただ待つことしかできない」（前掲, p. 186）のである．

Heidegger によれば，互いに共に語りあっているとき沈黙している人は,「言うべき何事かを持っているから」こそ，それをおこなうことが可能となるのであった．しかし本当にそうであろうか.「対話」という状況において，自分が語り出すことを期待されていることについては充分に認識しつつも，あえて何も語らないことによって，他者に「本来的に,『了解させるように暗示する』こと」が本当に可能であろうか．確かに場合によっては，そういうことがあり得るのかもしれない．しかし多くの場合,「ひとは往々にして,“言葉に詰まって”沈黙せざるをえない」（前掲, p. 185）．期待されつつも，他者に返す「ことば」が見つからず，そうせざるを得ないのである[10]．

われわれは沈黙において，他者から自分が語り出すことを期待されているにもかかわらず，いかなる「ことば」も返すことができないという状況に陥る．何をどのように返答して良いのか，途方に暮れてしまうのである．まさにこのとき,「対話の渋滞」（前掲, p. 186）が生じることになる．両者の間において,「ことば」の交流が一切「消滅」する．日常的には「頽落」した，すなわち「非本来的」な状態にある現存在としてのわれわれも，いったんこの状態に陥ると,「空談」，すなわち「日常的にわれわれが話しているもの」をも止めざるを得なくなる．なぜなら，いかなる「ことば」も他者と交わすことができなくなるからである．したがってわれわれは,「対話」における沈黙という様態において，もはや公共性のうちへと入り込むことができなくなる．そして，われわれが語り出すことを期待しているにもかかわらず，われわれから何ら「ことば」を得ることができない他者も，同じようにそれに入り込むことができなくなる．つまりこれこそわれわれが，日常的に「世人」として存在している事態から離脱するこ

とを可能にするモメントとなるのである．

このような「対話」の破綻としての沈黙において露呈するのは，その当事者であるわれわれと他者の「無」である．両者は互いに「世界内存在」として存在しているのであり，それにおける「世界」は，「そのつどすでにつねに，私と他者たちと共に分かち合っている」はずであった．しかしこの沈黙という様態においては，この「世界」の意義を付与していた「私たち」という場が無化することになるのであり，「個別的な≪私≫は，≪私たち≫の無のさなかにおいて，死滅した世界の前に佇むことを余儀なくされる」（前掲, p. 189）．したがってこの様態においては，Krill が考えていたような他者の「世界」を了解する可能性は，全くないということになる．Krill は，クライエントという他者との「対話」を通じて彼らの「世界」観もしくは「世界」のあり方を了解し，それによって彼らは，自らそれを了解することが可能になると考えていた．さらにはそれが，彼ら自身，その「存在する意味」を把握することになると考えたのであった．彼は「対話」を，ただ単に他者との間で「ことば」の交流をおこなうこととして捉えた．つまりそれを，他者との間で「互いに語りそして聞く行為」として，あくまで単純に捉えてしまったのである．しかし「対話」という状況においては，その破綻としての沈黙が属しているのであり，実際にそれが生じたときには，Krill が考えているような他者の「世界」観もしくは「世界」のあり方を了解すること自体が不可能となるのである．

第３節　「良心の呼び声」と「頽落」した状態からの離脱

このように「対話」という状況において沈黙という様態が生じた場合，われわれはその相手である他者とともに，「死滅した世界の前に佇むことを余儀なくされる」．両者とも，もはや公共性のうちへと入り込むことができなくなるのである．つまりこの沈黙こそわれわれが，日常的に「世人」として存在している事態から離脱することを可能にするモメントとなるのである．

「対話」の破綻としての沈黙において露呈するのは，その当事者であるわれわれと他者の「無」であった．このときわれわれは他者とともに，「居心地のわるい不気味さ」（ハイデガー[2003b], p. 352）に直面することになる．なぜならそれは先にも述べたように，「この『世界』の意義を付与していた『私たち』という場が無化」してしまったからである．そしてこの「不気味さ」こそが，「単独化された世界内存在を根本的に規定」（同前）する．まさにわれわれは，この沈黙という様態において，他者とともに「単独者」として存在することになる．そして Heidegger によると，このとき，われわれおよび他者が「良心の呼び声の呼ぶ者」（前掲, p. 353）であることが明らかになるという．

ここでいう「良心（Gewissen）」とは，すなわち「現存在を，最も固有な責めあるものでありうることを呼びさます」（前掲, p. 384）ものであり，「あくまでも現存在の現象として把握せられ，その構造は，現存在の存在をなす気遣いの機構に即して解き明かされ」（三富[1980], p. 172）るものである．この「良心」はまず，「呼び声（Ruf）」として性格づけられる．なぜな

らそれは，「現存在になに事かを呼び伝えて来るから」（前掲, p. 173）である．したがってこの「良心の呼び声」によって呼びかけられる者は，すなわち，「明らかに現存在自身」（ハイデガー[2003b], p. 343）である．この「呼び声」は，現存在が「おのれ固有の自己」（同前）を目指すよう，それ自身を呼びかける．それでは，誰が現存在を呼ぶのであろうか．それは，呼ばれている現存在自身である．つまり，「現存在こそが呼ぶ者であって，かつまた同時に呼びかけられている者」（前掲, p. 355）なのである．そもそも現存在は，「つねに自分自身のあり方を問うという仕方で存在する」のであり，おのれが「良心の呼び声」としておのれ自身を呼びかけることになるのである．この「呼び声」は，「まったく声に出して口外することを無しですます」（前掲, p. 345）のであり，そして「良心」自体は，「ひたすら不断に沈黙という様態において語る」（同前）ことになる．

「良心の呼び声」によって呼ばれるのは現存在であったが，それと同時に，呼ぶ者も現存在自身であった．そして「良心」自体が語るのは，「沈黙という様態」においてであった．つまり，まさにこの様態において，現存在が「良心の呼び声の呼ぶ者」であることが明らかになるのである．ただしその「声」自体は，あくまでどこからともなく聞こえてくるものであり，「われわれ自身によって計画されたり，準備されたり，自発的に遂行されたりするものでは，全然ない」（前掲, p. 350）．そしてそれは，自らの「期待に反して，それどころか意志に反してすら呼ぶ」（同前）のである．

Krill による実存主義ソーシャルワークにおいては，「対話の必要性」という治療概念が最も重要であると考えられるのであった．なぜなら，ソーシャルワーカーがクライエントという他者との「対話」を通じて，彼らの「世界」観もしくは「世界」のあり方を了解し，さらには彼ら自身がそれを了解していく必要があるからである．しかし実際に，クライエントが日常的に「世人」として存在している事態，すなわち「頽落」した状態から離脱するためには，「対話」の破綻としての沈黙が必要不可欠である．したがって，この「対話の必要性」という治療概念が最も重要であることには変わりないのであるが，ただしそれはあくまで「対話」の延長線上に，その破綻としての沈黙が生じる「可能性」があるからである．「対話」を通じて，ソーシャルワーカーがクライエントの「世界」観もしくは「世界」のあり方を了解し，さらに彼ら自身がそれを了解するからでは，決してないはずである．

クライエントは，ソーシャルワーカーとの「対話」を通じて，自らの「ことば」を連綿と，もしくは途切れがちに「語ること」になる．後者はそれに対して，じっくりと耳を傾けていく．つまり，「聞くこと」に徹していくのである．そしてさらに，それに対して何らかの見解を「語ること」になる．その際に前者は，後者の「ことば」に耳を傾ける．つまり，「聞くこと」に集中していくのである．しかし，前者が抱えている課題が深刻であればあるほど，後者の口からは「ことば」が出にくくなる．さらには，「“言葉に詰まって”沈黙せざる」を得なくなる．期待されつつも，前者に返す「ことば」が見つからず，そうせざるを得なくなるのである．このとき「対話の渋滞」が生じるのであり，そして「ことば」の交流が一切「消滅」すること

になる．

このような「対話」の破綻としての沈黙において露呈するのは，その当事者としてのクライエントとソーシャルワーカーの「無」である．両者は「死滅した世界の前に佇むことを余議なくされる」のであり，「居心地わるい不気味さ」に直面することになる．なぜならそれは，「この『世界』の意義を付与してきた『私たち』という場が無化」してしまったからであり，両者はともに「単独者」として存在することを余議なくされるのである．

しかしこのように単独化したクライエントとソーシャルワーカーは，両者ともに，もはや「世人」，すなわち「頽落」した状態として存在してはいない．したがって，公共性のうちへと入り込むこともなくなる．このとき両者は，自らが「良心の呼び声の呼ぶ者」であることを見出すのであり，そしてこの「呼び声」によって，「おのれ固有の自己」を目指すよう自ら呼びかけることになる．

「疎外」に悩む，すなわち自らが「存在する意味」を把握することができず，自己が不安定な状態にあるクライエントは，この「対話」の破綻としての沈黙において，自らが「良心の呼び声の呼ぶ者」であることを見出す[11]．自ら「最も固有な責めあるものでありうることを呼びさます」のである．このとき彼らは初めて「頽落」した状態，すなわち「非本来的」な状態から離脱することができるのであり，その「存在する意味」を把握することができるようになるのである．

第４章　Krill による援助枠組みの「限界」とその乗り越えの可能性

これまでおもに Heidegger 自身による見解を踏まえ，Krill による援助枠組みの検討をおこなってきた．ここではその結果をもとに，Krill による援助枠組みにおける「限界」を明らかにし，さらにその乗り越えの可能性についての考察をおこなっていく．

Krill による実存主義ソーシャルワークは，「疎外」に悩む，すなわち自らが「存在する意味」を把握することができず，自己が不安定な状態にあるクライエントを援助するために展開された援助枠組みである．Krill は彼らを「世界内存在」として捉え，彼らがソーシャルワーカーとの「対話」を通じて，自らの「世界観」もしくは「世界」のあり方を「了解することが最も重要となる」と考えたのであった．ソーシャルワーカーとクライエントの「対話」こそが，この「疎外」という問題を解決するために必要と考えたのである．しかし先にも述べたように，彼は自らの援助枠組みを展開していく際に，「世界内存在」という概念を作り出した Heidegger にまで遡ることなく，May による解釈をもとにそれをおこなってしまった．確かにクライエントは「世界内存在」として存在してはいるものの，日常的には「世人」として存在している．すなわち「頽落」した状態にあり，仮にクライエントが同じ状態にあるソーシャルワーカーと「対話」したところで，それはただの「空談」と化していく可能性が高い．したがって，彼らがその「存在する意味」を把握することができるようになるという保証は，何もないのである．

Krill による援助枠組みにおける「限界」の 1 つが，ここにある．

また Krill は，クライエントとソーシャルワーカーにおける「対話の必要性」を強調していた．しかし彼は「対話」を，ただ単に他者との間で「ことば」の交流をおこなうこととして捉えていた．つまりそれを，他者との間で「互いに語りそして聞く行為」として，あくまで単純に捉えてしまっていたのである．しかし「対話」には，その破綻としての沈黙が属しているのであり，実際にそれが生じたときには，彼らがソーシャルワーカーとの「対話」を通じて，自らの「世界観」もしくは「世界」のあり方を了解すること自体が不可能となる．なぜなら彼らは，ソーシャルワーカーとともに，「死滅した世界の前に佇むことを余儀なくされる」からである．ここに，Krill による援助枠組みにおけるもう 1 つの「限界」がある．

Krill による援助枠組みにおいては，これら 2 つの「限界」があると考えられるのであるが，それでは果たしてどのようにしたら，それらを乗り越えることができるのであろうか．

Krill による援助枠組みにおけるこれらの「限界」，すなわち 1）クライエントとソーシャルワーカーの間における「対話」がただの「空談」と化していってしまうこと，2）「対話」自体にその破綻としての沈黙が属していることによって，実際にそれが生じたときには，彼らがソーシャルワーカーとの「対話」を通じて，自らの「世界観」もしくは「世界」のあり方を了解すること自体が不可能となること，以上 2 つを乗り越えるためには，彼自身が「対話」ということを重視していたにもかかわらず見落としていた，その構成要素である沈黙に焦点を当てていく必要がある．それはすなわち，「対話」の破綻のことであった．この様態において露呈するのは，クライエントとソーシャルワーカーの「無」である．そしてそれら両者は，「単独者」として存在することを余儀なくされることになり，したがって公共性のうちへ入り込むこともなくなる．クライエントは，自らが「良心の呼び声の呼ぶ者」であることを見出すのであり，自ら「最も固有な責めあるものでありうることを呼びさます」のである．このとき彼らは初めて「頽落」した状態，すなわち「非本来的」な状態から離脱することになり，自らが「存在する意味」を把握することができるようになっていく．彼らはもはや「世人」として存在してはおらず，したがってソーシャルワーカーとの間で「空談」を展開することもなくなる．このように，「対話」の破綻としての沈黙によって，これらの「限界」のうちの 1 つめを乗り越えることが可能となるのである．

もう 1 つの「限界」，すなわち沈黙が生じたとき，クライエントがソーシャルワーカーとの「対話」を通じて，自らの「世界観」もしくは「世界」のあり方を了解すること自体が不可能になるということについてであるが，先にも述べたように，彼らとソーシャルワーカーの間の「対話」は，ただの「空談」に終わってしまいかねないのであり，したがって彼らがその「存在する意味」を把握することができるようになるという保証は何もないのであった．そして実際のところ，その意味を把握することを可能にするのは，「対話」の破綻としての沈黙であった．まさにこの様態が生じたとき，彼らはその意味を把握することができるようになるのである．2 つめの「限界」についてであるが，確かに沈黙という様態が生じてしまうことは，Krill

自身が展開した援助枠組みの「限界」ではあるものの，実際には却ってそれが，この援助枠組みの本来の目的，すなわちクライエントがその「存在する意味」を把握することを可能にするのである．この沈黙こそが，先に挙げた 1 つめの「限界」と同様に，2 つめのそれをも乗り越えることを可能にしていくのである．

おわりに

Krill による援助枠組みは，Heidegger 自身による見解にまで遡って検討した場合，以下の「限界」があること明らかとなるのであった．それらはすなわち，1）クライエントとソーシャルワーカーの間における「対話」がただの「空談」と化していってしまうこと，2）「対話」自体にその破綻としての沈黙が属していることによって，実際にそれが生じたときには，彼らがソーシャルワーカーとの「対話」を通じて，自らの「世界観」もしくは「世界」のあり方を了解すること自体が不可能となること，以上 2 つである．そしてそれらを乗り越えるためには，彼自身が「対話」ということを重視していたにもかかわらず見落としていた，その構成要素である沈黙に焦点を当てていく必要があると考えられるのであった．

Krill による実存主義ソーシャルワークは，Heidegger による見解をもとに，その援助枠組みを積極的に修正していく必要がある．そうすることによって，それが実際に「機能」し得るものへと再構築していくことが可能となるのである．

注

1 西光義敞, 1982. 米国における実存主義的ソーシャルワーク．龍谷学会（編），龍谷大学論集，421, pp. 2-23.

2 信川美樹, 1998. 実存主義ソーシャルワーク研究 - D. F. クリルの Existential Social Work を中心に -．同志社大学社会福祉学会（編），同志社大学社会福祉学，12, pp. 103-115.

3 拙稿, 2004. D. F. Krill による実存主義ソーシャルワークの援助の枠組み．ソーシャルワーク研究所（編），ソーシャルワーク研究, 29（4）．相川書房, pp. 52-58.

4 Krill 自身が「世界内存在」という概念について直接的に言及しているところは，おもに 5 箇所（Krill[1978], p. xvii, p. 26, p. 38 ; Krill[1996], p. 268, pp. 270-271）ある．

5 Heidegger は，存在者（Seiendes）と存在（Sein）を明確に区別する．ここでいう存在者とは，すなわち「存在するもの」（平田[2002], p. 118）のことであり，一方の存在とは，「存在者を存在者として規定しているもの」（渡辺[1980], p. 19）のことである．これら両者における明確な区別のことを「存在論的差異（ontologische Differenz）」という．

6 「存在的」とは，存在者の事象領域を表すものである．存在的な問いは，そこでの諸事象の知見を増大させる問いかけを遂行する．その遂行をもとに，歴史，自然，空間，生命，言語等々といった種々の実証科学が成り立つことになる．（前掲, p. 25）．

7 「存在論的」とは，存在者の存在を解明しようとすることを表すものである．存在者の事象領域の解明よりも，その存在を解明する存在論的な問いこそが，より根源的な問いである（前掲, pp.25-26）．

8 May, R., Angel, E. &Ellenberger, H.（eds）, 1958. *Existence : a new dimension in psychiatry and psychology*. Basic Books, Inc.

9 古荘真敬は，「私たちが相互に行う『対話』をゲームに譬えるならば，このゲームにおいてひとが打

つことのできる手は，『発話すること』『聴くこと』そして『沈黙すること』の三種類であると形式的に捉えることができる」（古荘［2002］, p. 183）と述べている．

10 古荘によれば，「沈黙すること」をこのように弁論的な技術の一種であるかのように分析する Heidegger の見解は，「批判的に改訂されなければならない」（前掲, p. 185）という．何事かを「了解させる」ための沈黙というものは，「ごく稀な（教師然としたタイプの人間がレトリックとして現われる）ケース」（同前）に過ぎないのである．

11 クライエントのみならずソーシャルワーカー自身も，この沈黙という様態において，自らが「良心の呼び声の呼ぶ者」であることを見出すことになる．つまり「頽落」した状態，すなわち「非本来的」な状態から離脱することができるようになるのであり，自らが「存在する意味」を把握することができるようになるのである．ただしここでポイントとなるのは，もちろん，あくまでクライエントが自らの「存在する意味」を把握することができるようになることであり，ソーシャルワーカーがそうなることではない．

文献一覧

古荘真敬，2002.ハイデガーの言語哲学 : 志向性と公共性の連関. 岩波書店.

ハイデガー, M. 2003a. 存在と時間 1, 原佑・渡辺 二郎（訳）．中央公論新社.

_____ . 2003b. 存在と時間 2，原佑・渡辺 二郎（訳）．中央公論新社.

Heidegger, M. 2006. *Sein und Zeit,* Neunzehnte Auflage. Max Niemeyer Verlag Tübingen.

平田裕之, 2002. 存在了解. 木田元（編），ハイデガーの知 88. 新書館, pp. 118-119.

飯島宗享（訳者代表），1965. 『実存の哲学』用語解説. 実存の哲学. 河出書房新社, pp. 391-392.

Krill, D. F., 1978. *Existential social work* , The Free Press.

_____, 1996. Existential social work. Turner, F. J.（ed.）, *Social work treatment : interlocking theoretical approaches,* 4th ed., The Free Press, pp. 250-281.

May, R., 1958. Contributions of existential psychotherapy. May, R., Angel, E. &Ellenberger, H.（eds.）, *Existence : a new dimension in psychiatry and psychology.* Basic Books, Inc, pp. 37-91.

三富明, 1980. 現存在と時間性（その 1）．渡辺二郎（編），ハイデガー「存在と時間」入門. 有斐閣, pp.151-198.

高田珠樹, 1994. 世界内存在. 木田元（他編）, 現象学事典. 弘文同, pp. 279-280.

寺邑昭信, 1980. 現存在の予備的な基礎的分析（その 2）．渡辺二郎（編），ハイデガー「存在と時間」入門. 有斐閣, pp. 95-150.

渡辺二郎, 1980. 『存在と時間』の基本構想. 渡辺二郎（編），ハイデガー「存在と時間」入門. 有斐閣, pp. 1-52.

（2007.12.12 受理）